ハンドボールにおける速攻の分類に関する研究

廣田裕輔（中学校課程・保健体育専攻）

［研究動機・目的・方法］

本研究は、スウェーデンチームの典型的なプレーに注目し、運動学的な立場に基づき、速攻の戦術行動において運動の質という観点からハンドボールの速攻のプレーを追うことにした。それによって速攻の戦術行動において、どのように攻撃を展開できるかということをねらいとし、今後のハンドボール指導に結びつけるようにした。

［本論］第１章　ハンドボールにおける競技の特性

ハンドボールのゲームの目標は、手で相手のゴールに投げ入れ、自分のゴールを相手の攻撃から防御するところにあるのだが、その際、一方のゴールエリア前でそのプレーがなされる。このようなプレーのなかの戦術として反撃速攻が挙げられる。反撃速攻には、１次、２次、３次速攻がありその経過によって個人戦術、グループ戦術、チーム戦術というように形態の変化が観察できる。この場合には、多くの技術的・戦術的要素を非常に狭い空間で相互に結びつけることがとりわけ重要となるが、その際、運動の組合せは標準化された条件の下ではほとんど行なわれていないのである。

第２章　ゲーム分析とは

本研究では、ゲーム分析する上で、ＶＴＲを用いて分析を行なったわけだがその時に「球技論的立場からの観察」さらに「モルフォロギー的立場からの観察」を基礎にした球技論を用いた。この３つの方法は印象分析をする上で非常に必要な方法である。その際特に、マイネルのカテゴリーの利用は、本研究の印象分析において非常に重要な役目を果たした。それは、ハンドボールにおいて観察する際に客観的把握というものが困難となるため、目で見るだけではなく運動に“共感”しながら印象分析を行なう事が有効なためである。このマイネルの８つのカテゴリー（運動の局面構造、運動のリズム、運動の流動、運動の弾性、運動の先取り、運動の正確さ、運動の調和、運動の伝導）の中で、ボールゲームの特性上、運動の局面構造と運動の先取りという概念を重要視して取り扱った。

第３章　ゲーム観察の実際

ゲーム分析をするのにあたり、速攻の攻撃（１次、２次、３次速攻）を７つの攻撃パターンに分類できた。

反撃速攻のなかで行なわれる攻撃は“ずらし”の攻撃が中心となるのだが、その“ずらし”という“きっかけ”のプレーでポストを使った攻撃やサイドを使った攻撃が挙げられる。スウェーデンチームの場合、速攻について「オールコートを使ったセットプレー」という攻撃戦術の考え方が見て取れる。すなわち、１次速攻がだめなときの２次速攻、そして、２次速攻が防御されそうなときの３次速攻という形になるのである。

スウェーデンチームの場合、速攻の形の中心となるのが２次速攻であった。勢いで行くのではなく各プレーヤーの巧みな個人戦術を交えながら“ずらし”や“ねじれ”を使いそれを得点へ結びつけていたのであった。

そして、試合のレベルが高くなればなれほど、１次速攻よりも２次、３次速攻のプレーの割合が高くなっているのがわかった。

［結論］

本研究の印象分析の結果として特に重要視されるのが「瞬時の判断能力」と「個人技術の応用能力」、「運動共感」というところである。

速攻の攻撃はセットの攻撃と違い、考える時間が比較的短いために瞬時にまわりの状況を把握し行動しなくてはならないため、ボールを保持しているプレーヤー以外のオフェンスプレーヤーも常に自分にボールが来ることを考え位置取っていなくてはならないのである。常にそのようなことを考え「先取り」し、そのプレーに共感していかなくては攻撃は成功しない。そしてプレーに対して共感するということにおいてはある程度の経験を持ち、そのプレーに対する知識を学ばなければならないのである。それができて初めて速攻の中での諸運動が可能なものとなるのである。

本研究は分析をするのにあたりマイネルのカテゴリーを使うことによってより深く速攻戦術の成り立ちを把握することができた。

今後の課題として今まで研究した成果を自分でプレーするときや、指導するときの実践のよりどころにすることで実戦を深め、経験財を増やしていくことである。

－引用・参考文献省略－